梅花児童文学, 31:38-53

「学校の花」からみる川端康成の「子供の読物」

小林 和江

川端康成の「学校の花」は昭和八年九月号から一二月号まで四か月にわたって『少女倶楽部』に連載され、昭和一二年に中央公論社から刊行された川端初の少年少女小説集『級長の探偵』に収録された。この小説集には『少年倶楽部』『少女倶楽部』掲載作品が収録されており、「学校の花」は『少女倶楽部』掲載中唯一の連載小説である。同誌掲載としては四作品目で、それまでに川端は、「愛犬エリ」で子犬を仲立ちとした先生との親愛を、「開校記念日」で三人の少女たちの友情を、「夏の宿題」で友人と仲直りする妹とそれを見守る姉を描いてきた。

連載が始まる前、八月号には「作者の言葉」が掲載されている[1]。

皆さんの学校にはどんな花が咲いてゐますか。／皆さんはみんな学校の生きた花です。／私のこの物語も、皆さんの学校の花となつてくれたら、どんなにうれしいでせう。／それで、『学校の花』といふ題をつけました。／『学校の花』といふ言葉は平凡ですけれども、考へてごらんなさい。ずゐぶんいろんな意味が含まれてゐます。

（中略）

やはりこの物語も、教室で皆さんと共に学び、校庭で共に遊ぶ、皆さんのお友達のことを書きました。／こんな花は皆さんの学校にも、きつと咲いてゐると思ひます。決して夢のやうな花ではありません。／皆さんといつしよに生きてゐる花です。

タイトルに様々な意味を込めようとしたことと、「教室で皆さんと共に学び、校庭で遊ぶ、皆さんのお友達のことを書きました。」とあるように、子どもの日常を描くことを意識していたことが確認できる。

『級長の探偵』刊行の翌年には、改造社から出版された『川端康成選集　第五巻』(昭和一三年一〇月二〇日)に川端の意志で収録される。川端は、昭和一三年一〇月四日付の中央公論社藤田圭雄宛の速達で、

（前略）改造社の選集に、級長の探偵のうちの「学校の花」一篇だけ頂戴出来ませんでせうか。創元社から雪国を貰ふことになりまして、化粧と口笛と学校の花を加へ一冊にしたいと存じます。増巻です。級長の探偵出版後日浅く、申し兼ねますが、少女の小説も一篇選集に入れておきたいと存じまして。選集と級長の探偵とは、大人と子供と、読者の範囲がちがふかと思はれますので、お願ひする次第です。（後略）[2]

と連絡を取っている。同選集収録作品は、「雪国」「化粧と口笛」「針と硝子と霧」「慰霊歌」と「学校の花」で、「学校の花」以外はすべて一般雑誌か新聞連載の作品である。「少女の小説」を一般向けの自選集に入れたいと言っており、川端の気に入った一作だったのだろう。

『川端康成選集　第五巻』「あとがき」には、

（前略）「学校の花」を加へ得たのは、やはり中央公論社の好意による。同社発行の少年少女小説集「級長の探偵」中の一篇である。「少女倶楽部」に発表したものだが、子供の読物としてはふさはしくないところが少くない。しかし、子供のものを幾つか書いた記念に、この一篇を入れてみたかつた。「学校の花」の出来た頃、私の掛りの「少女倶楽部」記者藤本三三氏は出征中、藤本氏に次いで私掛りの斎藤喬孝氏は病没した[3]。

とある。

ここで川端は「子供の読物としてはふさはしくないところが少くない」が「子供のものを幾つか書いた記念」として『級長の探偵』から一篇選んだと述べている。何が「ふさはしくない」のだろうか。

本稿では、「学校の花」の何が「子供の読物としてはふさはしくない」のかを検討し、川端が考える「子供の読物」について考察していきたい[4]。

一、『級長の探偵』の中での「学校の花」

（一）「学校の花」概要

改めて詳しく内容を確認する。

主人公は女学校一年生の千花子で、同級生や上級生からも慕われる少女である。夏休みを前にして、古里の海辺で過ごすことを楽しみにしている。帰省の準備をしていると、千花子を慕う三年生の清水さんに呼び出された。清水さんは、学校を辞めること、生き別れた妹がいることを打ち明け、千花子に願い事を託す。

千花子は海辺の町に行き、臨海学校でやってきた小学生の行雄たちと合流する。この小学生たちは千花子の後輩にあたり、行雄は幼馴染である。行雄は旅の役者たちを見かけ、その中にいた鳩使いの少女が気になっている。そして行雄と一緒に千花子もその少女が意地悪そうな女に叱られながら働かされているのを目撃する。少女の名前は小夜子といい、踊りが上手であることがわかった。千花子は踊りに詳しい叔母に小夜子の踊りを見せたら一座から助け出すことができるのではないかと考える。

夏休みが終わり、千花子は学校へ戻るが清水さんの姿はない。清水さんからの手紙で彼女が貰い子であることを知ったが、それが学校を辞める直接の理由ではないようだ。寄宿舎の舎監も務める青木先生が、千花子を清水さんが働いている百貨店の食堂に連れて行ってくれたので再会できたが、清水さんはよそよそしい。

清水さんの家に行き事情を聞こうと考えた千花子は、再会を喜んでいないようだったことに不安を感じ、行雄を一緒に連れて行く。行雄は千花子から清水さんが貰い子だということを聞いており、清水さんの母親の前で口を滑らせる。母親は清水さんが学校を辞めた理由を察して退学を取り消してもらうため先生に会いに行く。

清水さんは自分が貰い子だから家計が悪化したことを話してもらえないのだと考え、親に内緒で、自分から女学校を退学した。素行の悪さで退学になるようにしたため、友人たちからも嫌われるようなふるまいをしてしまったが、せめて千花子にだけは嫌われたくないと思い、

夏休み前に千花子に退学することを話したのだった。願い事は両親の実子である弟が中学入試を受験できることだったと明らかにする。清水さんは千花子とともに学校へ行き、友人たちにもすべてを話して仲直りをする。

東京に出てきた小夜子は行雄のところにやって来る。千花子が清水さんを連れて行雄のところに来たため、小夜子と清水さんが会う。清水さんが持っていた写真から、二人が姉妹であることがわかり再会を果たすことになる。千花子は父母が海外から帰り家から通学するため、小夜子を家に呼び、一緒に暮らすことを決める。小夜子を旅の一座から抜けさせるため、清水さん、小夜子、千花子、行雄の四人揃って千花子の叔母に頼みに行く。

主要登場人物は千花子、清水さん、小夜子、行雄、小夜子の叔母、清水さんの弟、母、女学校の友人たちと青木先生、行雄の担任の武田先生である。

物語の主題は、千花子が清水さんの抱える悩みを解決すること、古里で出会った小夜子を苦しい生活から解放することである。

（二）「ふさはしくない」のは何か

川端が言う「学校の花」の「子供の読物としてはふさはしくないところ」とは、他の『級長の探偵』収録作品に見られない要素だと考えられる。ここではそれを明らかにしたいが、その前に、収録された他作品と「学校の花」の共通点を確認しておきたい。

まずは学校内外での子どもたちの日常生活が描かれていることである。そして物語が幸せに終わるところも同じである。清水さんは両親と打ち解け合い、そして生き別れの妹との再会を果たした。小夜子は、辛い境遇から抜け出すことができ、姉と再会ができた。千花子、行雄、清水さん、小夜子の四人が揃い、『「さあ、千花さんの叔母さんのところへ行かう。」／と、行雄は先頭に立つて小躍しながら、部屋を出て行くのでありました。』[5]と締めくくられる最終場面は、明るい未来が開けることを示すようで、幸福感にあふれる。このような結末は他作品と同様であるとともに、一冊の本の最終話としてもふさわしい。

では他作品との違いをみていく。

主人公が女学校の生徒であるのはこの作品だけである。他作品はすべて小学校に通う児童で、一作品、「夏の宿題」で主人公の姉が女学校の生徒だが、彼女の学校生活が描かれることはない。「学校の花」では千花子たちが生活する寄宿舎での様子が描かれている。

次にこの作品の第三章が千花子の視点ではなく行雄の視点で描かれ、臨海学校での行雄たちの行動が詳細に描かれていることがあげられる。行雄と担任の武田先生との会話や、先生をお父さんと呼んでしまうこと、先生も我が子のように子どもたちと接している様子が会話を中心に詳しく描かれている。学校行事の一環であるが、いつもとは違う場所で共に寝泊りすることで、先生と生徒の距離が近くなっている様子がよくわかる。行雄たちが先生をからかってうたった歌があり、作品内では「子供の皆さんは、大人よりもずつと詩人です。／けれども、見るもの聞くもの、なんでもかんでも、すぐ歌にしてしまふことが、特に上手な子供は、どの学校にもゐるのです。」[6]と、行雄たちの創作としてとりあげ[7]、子どもの観察力や創造する力を褒めている。先生と行雄が歌詞について話したり、これに続いて伝書鳩ごっこをしたりする様子も詳細に描かれており、行雄がどのような子どもなのかを知

ることができ、小夜子救出の重要な役割を担う存在として認識できる。ただし、この行雄と先生たちの様子は、千花子不在の場面である。

それにしても、男子がこれほど活躍するのは『級長の探偵』収録作の中では珍しい。『少年倶楽部』掲載の「級長の探偵」はともかく、他の収録作品で男子が出てくるのは「学校の花」以後に書かれた「弟の秘密」の時雄、「翼にのせて」の政雄だけで、二人とも主人公の弟である。時雄も政雄も、主人公から見た範囲での言動が描かれるだけで、主人公が不在の場面では出てこない。「学校の花」のみ連載であるため、違う人物の視点が入るということも考えられるが、主人公が登場せず、男子である行雄の視点だけで描く場面は他作品にはない。また行雄は小夜子に思いを寄せ、小夜子も行雄を慕っている。男女間の恋愛感情的なものを描くという点も珍しい。

行雄が小夜子を思う場面では、「おとぎ話」のような語りが入っている。第一章では「美しい物語でもあこがれるやうに、行雄は海の遠くを見つめてゐます。水平線の彼方の美しい島へ行けば、行雄は王子で鳩使の少女はお姫さまになるとでも、夢見てゐるのでせうか。」[8]とある。第三章では、「…寝床といふものは、まことにおとぎばなしの国なのでせうか。ロマンスの女神がまた行雄に微笑みかけて――」[9]で始まり、王子さまやお姫さま、悪者と戦う勇者の行雄、魔法使いの千花子などが登場する。どちらも行雄の空想である。明らかな夢の話としては、「駒鳥温泉」に不思議で面白い話として出てくるものがあるが、このような王子さまやお姫さまといった空想話は他の収録作品にはみられない。

次に、服装について詳細に描かれていることがあげられる。食堂の女給の制服についてだが、同様に食堂女給が登場する「翼にのせて」と比べてかなり詳しい。「翼にのせて」では家の経済的悪化が原因で師範学校受験を諦め働きに出た少女の就職先が百貨店の食堂となっており、「白いエプロンをうしろで蝶のやうに結んで、食堂女給の姿に変つた栄子であつた。これも制服であつた。」[10]と記される。それが「学校の花」では「清水さんの背には、真白い大きな蝶々がとまつてゐます。／片側に二枚一組の翅の、後の翅の長いこと――腰のあたりまで細長く垂れて、清水さんの足の運びに従つて、ひらひらと揺れてゐます。エプロンの紐の蝶結なのです。」[11]となり、これ以外にも服や靴などの描写が続く。食堂女給は時代を映すものであり、このような詳細な描写は、読者に華やかな職業としての印象を与えただろう。

小学校高学年を対象にした『少女倶楽部』では、進学か就職かという話題は子どもの身近な問題として重要だったと考えられる。「駒鳥温泉」「翼にのせて」では受験が取りあげられている。「駒鳥温泉」では主人公二人がともに女学校に入学し、「翼にのせて」では一人は女学校、もう一人は先述の通り食堂女給になる。その後家計が回復して師範学校の受験が叶うところで終わるのだが、自分の意志で働くため悲壮感や我慢を強いられるような印象を読者に与えない。「学校の花」の清水さんについても同様で、次のような描写がある。

> ほんたうのところ、女学生の水兵服から百貨店の食堂の給仕服へ、制服を脱ぎかへるまでには、清水さんにも、いろいろと悲しいことやつらいことがありましたけれど、新しい職業に少しなれますと、その真白なエプロンのやうに、身も心もさつぱりとして、力がいつぱい湧いて来ます[12]。

学校を辞めたことを残念に思う気持ちがあるものの、自分の意志で働き始めた彼女はこの後も学校に戻ろうとはしない。川端が描いた『少女倶楽部』作品での食堂女給は、ともに憧れの職業と感じさせるもので、働くことを肯定するものと考えられる。一方で小夜子の旅の一座での扱いの酷さが目を引く。『少女倶楽部』を読む少女たちに劣悪な環境であることを示し、小夜子が助け出すべき可哀相な女の子だと印象づけることになる。旅役者と食堂女給の大きな差を感じさせる。

この小夜子の置かれている環境は千花子や行雄の日常とは離れたところにある。小夜子は旅役者の一座の中で育ち、学校にも行かず町から町へと渡っていく少女である。そしてにらみつけられたりぶたれたりと暴力を受けている。小夜子に対してひどい扱いをする一座の女のような大人は他の『級長の探偵』の登場人物にはいない。描かれるのは父親、母親、教師で、子どもを大切にしている大人ばかりである。

最後に、少女小説にありがちな「エス」的描写、女生徒同志や女性教師と女生徒間の恋愛感情の描写があげられる[13]。清水さんから千花子への思いは、「学校中で一番悲しい人が、千花さんに慰めてもらふ権利があるの。今はそれが私なのよ。」、「千花さんみたいにやさしい妹があつたら、こんないけない子にはならなかつたと思ふわ。」[14]などと語られている。

千花子も上級生としての清水さんに憧れを抱いてはいるようだが、清水さんからの手紙に対して「上級生つて、大げさに気取つたことを書くと、不思議がる気持も少しまじつて読みつづけてゐた」[15]と説明され、先生から清水さんと親しいのかと問われた時には「仲良しぢやなかつたんですけれど。」[16]と答えるなど、千花子の思いは恋愛ではないようだ。自分に託された願い事のため、夏休みの間悩み解決しようとするのは、恋愛感情よりも、自分を可愛がってくれる上級生の願い事をかなえようとする友情によるものといえよう。

千花子の思いは清水さんよりも青木先生に向いている。

> 寄宿舎へ新しく入つた少女はみな、四五人の舎監のうち、青木先生の足音を一番先に覚えてしまひます。先生がびつこだからといふのではありません。また、意地悪い猫のやうに、足音を忍ばせて巡視するからといふのではありません。少女達が青木先生を好きだからなのです。好きになれば、足音まで好きになつてしまふのが、女学生達です。静かな夜の自習時間など、廊下に青木先生の足音が聞えますと、なんだかしらない喜びが、自分の胸を踏んで行くやうな気のする少女も、少くないのでありました[17]。

好きな先生に対する心情を表現している箇所である。「夏の宿題」では小学生が担任の先生に甘え、眼鏡を壊すぐらいじゃれるように親しんでいた。しかし千花子たちの青木先生への思いは「夏の宿題」のような無邪気な行動によってではなく、足音を聞くだけで青木先生だとわかるというように聴覚を使って表現され、さらに「なんだかしらない喜びが、自分の胸を踏んで行くやう」と描かれている。こういった独特の表現は他の収録作品では認められない。

「学校の花」と他作品とを比較すると、以上のような違いが認められるのだが、では、これらの中で、「学校の花」に対して、「子供の読物としてはふさはしくない」と川端が述べる所以はどれなのか。

まずは何よりも小夜子の置かれた環境であろう。連載開始前の「作者の言葉」にあった「教室で皆さんと共に学び、校庭で共に遊ぶ、皆

さんのお友達のことを書きました。」という内容にあっていない。川端は「少年少女の日常の現実生活に触れた作品」[18]は少なく、「少年の現実生活に取材した作品」[19]が低級俗悪だと嘆き、自作の「級長の探偵」や「開校記念日」を良いものとして推賞していた[20]。学校を舞台に子ども同士の友情を描いたこの二作と比較すると、旅芸人一座の少女の救出を描いた「学校の花」は非日常的である。

このような非日常を取り入れ、生い立ちなどに不幸がある設定は「少女小説」にみられる[21]。川端は大正一五年三月号の『若草』で「少女雑誌の読物」について次のように述べている。

> 勿論、少女雑誌は沢山あり、少女小説も沢山ある。それは成人の読物でもなく、児童の読物でもなく、少女の読物であるにはちがひない。そして少女達はそれらによつて頬を紅くし、また夢を飾つてゐる。しかしながら、私達の純文学的の立場から見れば、それらを芸術品として認めるには躊躇せざるを得ないのである。現にそれらのお蔭で少女達は大分少女病に、陥つてゐるらしい。青年は覇気に燃えなければならないやうに、少女は感傷に沈んでこそ可憐であると考へられないこともないが、だからそれらの作品が芸術的にすぐれてゐると云ふ証拠にはならない。[22]

これに加えて、「少年少女の世界を描いた傑作と云へば、誰しも先づ樋口一葉女史の『たけくらべ』を思ひ出す。」[23]として「たけくらべ」を称賛したうえで、「今日の日本の文壇には少女を描いた作品は殆ど見当らない。あるとしても、非常に理想化されてゐて血の通つてゐないことが多い。」[24]と書いている。「少女小説」と「少女を描いた作品」の違いは明確ではなく、大正一五年時点で具体的にどういう作品を念頭に置いているのかも示していないが、ここで川端が、吉屋信子らに代表される「少女小説」を「児童の読物」に含めていないことは確かだろう。「児童の読物」と「子供の読物」を同義と捉えたうえで、これらが子どもの日常を描いたものとするなら、清水さんや小夜子の生い立ちに与えられた、貰い子や生き別れの姉妹という設定、それによる波乱万丈の物語は「少女小説」的で、「子供の読物としてはふさはしくない」ことになるだろう。

とすれば、「少女小説」の特徴的な要素である「エス」的関係も、同様なのではないか。清水さんの千花子への親愛、千花子の青木先生への信愛を、やや過剰な比喩表現の使用によって描くことで、「学校の花」の作品世界は「少女小説」に近づいている。これもまた、川端にとって「学校の花」の「子供の読物としてふさはしくないところ」だったのではないだろうか。

とはいえ、「学校の花」の主題は、非日常的な小夜子救出劇のほかにもう一つある。清水さんが抱える問題、すなわち、貰い子であることからの両親への遠慮を解消させ、わかりあえるようにするという問題の解決を千花子が行ったことである。あわせて千花子自身も成長することになり、行雄たちの臨海学校での様子なども含め、これらの点においては、「学校の花」は、「子供の読物」としての性格を有しているといえよう。

次節では、「学校の花」の「子供の読物」らしい側面に焦点を当て、清水さんの悩みの中心とそれを解決した千花子について考察する。そして千花子の持つ、問題を解決させる力は、この作品が収録された『級長の探偵』の他の子どもたちにもみることができないかを検討したい。

二、「学校の花」の少女の心

（一）清水さんの「ひがんだ暗い心」

まず清水さんについて考えていきたい。

「清水さん」は重要な登場人物であるのに名前が付けられていない。千花子や小夜子もそうだが、他の作品でも主要な女の子は名前で呼ばれ、姓で呼ばれるのは先生である。また「清水さん」には弟がおり健一という名前がある。千花子と行雄が清水さんの家を訪ねる場面で、「清水さんゐますか。」／姉さんも、お父さんも、お母さんも、健一自身も、「清水さん」にはちがひありませんから、健一はちよつとまごついてゐますと」[25]とあり、ここでも「清水さん」のままで名前が出されない。この家では「清水さん」だけが貰い子であるから、本来の姓は清水ではない。それなのに「清水さん」として名前をつけないことで、貰い子の立場である彼女が何者なのかを読者に考えさせる。

清水さんの悩みを、手紙と青木先生の話から千花子は知ることになる。手紙は、たたみかけるようなマイナス感情の列挙で、自己否定的な言葉にあふれている。「いけない子」「私の手紙なんか…汚れよ。」「けがらはしい自分が恥づかしく」「可哀相な私」「自分で自分をいけないと叱ることが…慰め」「ひがんだ暗い心の私」「意地つぱり」「だあれも知つてくれなくたつて、私が悪い」「どうせお友達にもみんな裏切られた」「醜い私に愛想をつかさない？」「毒を注いだら、天使に私叱られる」[26]と、自分のことを可哀相と憐れみながら、ひがんだ暗い心を持ってしまうのが自分だと訴えている。

清水さんはこの手紙で自分が貰い子だということを千花子に伝えた。先生からは親に口答えをしたことがないことを褒められたが、口答えをしないのではなく、貰い子だからできなかった。できないのが悩みである。しかし、この悩みは解決する。

直接解決させたのは行雄だった。千花子から事情を聞いていた行雄が、千花子とともに清水さんの家に行き、「いいお母さんだなあ。ほんたうのお母さんと、ちつとも変らないなあ。」[27]とうっかり言ってしまったことで、母親に、清水さんが貰い子だということを既に知っており、親には何も言わずに学校を辞めたのだと気づかせたのだ。

この後の場面で清水さんは千花子に「親の心子知らずだった」「実の親子なら、打ち明けていつしよに苦労するのがほんたうねえ？」[28]と言う。実の親子でないことは事実であり変わりようのないことである。それはそれとして、学校を辞めた理由を理解してもらえたこと、一緒に苦労することができていることで、清水さんは自分が貰い子であることを乗り越えようとしている。清水さんの悩みを解決させた直接的なきっかけは行雄のミスである。それが、清水さん親子が隠し、何事もないように表面的な平和を保っていた生活を変えた。母親は清水さんの学校を辞めた理由を理解し、清水さんにも隠しごとがなくなった。親子一緒に苦労を分かちあうことで、わだかまりを消すことになった。

では千花子の役割は何なのか。それは、清水さんが抱えていた、貰い子だから親に正直に話せないという問題の根底にある、「ひがんだ暗い心の私」を救うことだったのだろう。手紙から窺える清水さんは、自己肯定感の低い、自尊感情が乏しい少女である。千花子は手紙で清水さんの心の内を告白され、貰い子であることを伝えられた。すべてが解決した後にも、清水さんは、親を憎み弟を羨んでいた過去の思い

を千花子に告白している。千花子は清水さんにとってすべてを打ち明けられる少女である。

清水さんに寄り添う存在としての千花子がこの作品の主人公である。相手を素直にさせる力をもつ千花子、それは千花子本人が素直な子どもであるからだ。それを示すために千花子の子どもっぽさ、無邪気な様子が作中には多く描かれている[29]。素直でない清水さんと対となる千花子を次にみていく。

（二）千花子の「あどけない、美しい心」

作品全体を通して千花子の子どもっぽさは強調されている。「上級生は無論のこと、同じ一年生でも、千花子のお母さんかお姉さんになりたいやうな気持ちにされてしまひます。」[30]とあるように、守ってやりたくなるような存在として描かれている。千花子は赤ん坊扱いされることに反感を持っているが、その動作は子どもっぽく、行雄の前で年上ぶったりするのも、かえって子どもらしい虚栄心のようにみえる。

一章で「赤ん坊みたいに、唇から涎が流れさうに可愛い」「お母さんのお乳で濡れてるのかしらと思はれるほど、うひうひしい」[31]と、何度も千花子の唇が描写されている。千花子の容姿については「長い睫が上と下とすれすれになるくらゐに目を細めて」[32]とあるぐらいであまり触れられていないのに、唇だけ詳細に書かれているのは違和感を覚えるほどである。しかし、「千花子の唇にくらべたら、口紅で飾つた唇なんて、まるでいやらしい造花です。」[33]と「口紅で飾つた唇」がいやらしいとされていることで、唇の描写は、幼さに価値を置くためのものだとわかる。

この唇の描写は川端が好んだ『枕草子』の「あてなるもの」に繋がるものではないだろうか。「あてなるもの」については同時期の川端作品にも引用が確認できる[34]。何度も繰り返される唇の描写は、子どもの上品な美しさ、かわいらしさ、無邪気さを表すためと考えられる。小学生や幼い子どもの純真さに対して、年上の女学生について批判的な書き方をした箇所は他にもみられる。前述した清水さんの手紙を千花子が読んだ後の文章で、「上級生つて、大袈裟に気取つたことを書くと、不思議がる気持も少しまじつて読みつづけてゐた千花子」[35]と説明され、「大げさ」で「気取つた」と非難めいた言葉になっている。そして、「夏の宿題」では女学校に通う姉が小学生の妹と自分を比べて、「郁子には、もう妹のやうに無邪気ないたづらが出来なくなつてしまつたのでせうか。」[36]と妹を羨む気持ちを先生への手紙で書き、小学生の無邪気さを良しとしている。

清水さんと親とのわだかまりをなくした直接のきっかけは行雄の失言だが、ずっと清水さんの悩みを解こうとしていたのは千花子だった。手紙を暗記するほど読み返し、清水さんの悲しみを自分の事のように感じ、学校を辞めた清水さんのことを考え続けた。先生に相談し、退学後の清水さんに会いに行き、さらに友人たちと仲直りができるように行動を起こした。

千花子は海外に赴任している両親をもつ裕福な家の子どもである。重ねて描かれてきた子どもっぽさ、幼さによって「素直な子ども」という千花子像ができあがっている。飾るところのない、思ったことを言葉にして行動する千花子は、「ひがんだ暗い心」を持つ清水さんとは育った環境も性格も正反対である。この千花子の素直さが、清水さんに悩みや本心を打ち明けさせた。清水さんも両親や弟のことを思う優

しい心を持つ子どもであるが、悩みを表に出すことができなかった。しかし千花子の素直さに触れることで、親とも友人とも関係をより良いものにすることができた。千花子の素直な心が清水さんを救うことになったのである。小夜子に対しては、千花子の行動力が大きな意味を持った。叔母に海辺の町まで来てもらい、実際に小夜子の踊りを見せ、踊りの師匠をつけてもらうことに成功する。

最終場面で清水さんは、

「小夜子、みんな千花さんや行雄さんのお陰よ。千花さんが、私の妹に会はせるなんて、でたらめだつたでしよ。小夜子を救ひ出すなんて、行雄さんにそんな力なかつたでしよ。でも、あどけない、美しい心は、どんなことでも出来るのねえ。天使の奇蹟にお礼を言ひませうよ。」[37]

と言う。行雄も千花子も純粋無垢であったことが、結果として清水さんと小夜子を幸せにした。二人は「あどけない、美しい心」を持った「天使」である。千花子は清水さんの言葉に対し、「お地蔵さまのお助けなの。」[38]と謙虚に答えるのだが、それもまた奢ったところのない純真さとして捉えることができよう。

「学校の花」では、千花子と行雄の「あどけない、美しい心」が「ひがんだ暗い心」の清水さんを素直にして問題解決に導いた。では、この作品が収録された『級長の探偵』のほかの作品では、子どもたちはどのように描かれているだろうか。

三、『級長の探偵』の子どもたち

「学校の花」では清水さんが「貰い子」「家計の悪化」「生き別れの妹」という問題を抱えていた。また小夜子も「旅の一座で暴力を受ける」「家族がいない」という境遇だった。このような問題を抱える子どもが、主人公の働きによって自らの「素直さ」を取り戻し、幸せになるという展開の作品が他にも『級長の探偵』収録作にある。「開校記念日」である。

「開校記念日」には、やさしく成績の良いまさ子、みんなから好かれる人気者の夏子、勉強も運動もできるが、親しみにくい寂しさがあり、すねたりするところのある、よし子が登場する。よし子は母親がおらず、小さな弟の面倒をみなくてはならない。まさ子は、級友たちから仲間はずれになりがちのよし子と一緒に開校記念日の舞台で出し物をし、成功をおさめる。よし子の父親が、出し物が終わった後で、まさ子の母親に言う言葉で物語は終わる。

「ありがたうございます。全校の模範生のお嬢さんと二人で、皆さんの前に出まして、よし子もどんなに肩身の広いことか。お嬢さんの御親切は、きつとあの子の心の、温かい目を開かせたにちがひございません。これからよし子も、皆さんにすかれるやうな、素直な子供になれるでございませう。」[39]

よし子が舞台に立ち、拍手を受けたことに対して父親が喜んで言う言葉である。舞台に立つ前のよし子の様子は「例へば、みんながきやつきやつと騒いでゐるところへ、よし子さんが入つて来たりしますと、

よし子さんがなんにも悪いわけでもないのに、またみんなも別に意地悪をするつもりでもないのに、みんなの賑やかな話声が、ちよつとの間、とぎれてしまふといつた風なのです。」[40]というものだった。理由もなく嫌われるような子だったよし子が、夏子とまさ子と出し物の練習をすることで「まさ子さんや夏子さんの心の、やさしい温かさが、しみじみと感じられる」[41]ようになる。好意を好意として受け入れられる素直な気持ちを持つようになったのだ。そして父親の言葉によって、素直なことが一番だというメッセージが伝えられる。

「開校記念日」のよし子は母親が、「学校の花」の清水さんには両親がいない。この二作品と同時期の川端の作品に「東京朝日新聞」に連載された「化粧と口笛」（昭和七年九月～一一月、夕刊　四二回）がある。「学校の花」と同じく『川端康成選集　第五巻』に収録されたもので、この中に、親がいないことで素直になれない子どもを描いた場面がある。

離婚で母親がいない六歳の女の子照美が、他人からの親切に素直に礼を言えないことについて、その父親が「みなし児根性の第一歩だ。感情の乞食の旅立ちだ。」[42]と考える。そして「みなし児をみなし児でなくするには、その子供をみなし児として哀れまないといふ方法しかない。」『まあ、お気の毒に、お母さんがいらつしやらなくて、寂しいでせうね。』／七八年後の照美には、あの聞きあきた言葉ほど憎むべき言葉は、世のなかに二つとないと思ふやうになるだらう。」[43]と考えている。

ここには哀れまないことの必要性と、同情の言葉は「憎むべき言葉」であることが示されている。これが「みなし児」を解放するために重要なことだとしたら、「感情の乞食」になることは本人の問題ではなく、子どもをそこに追い込む周りの人間の問題となる。一方、「開校記念日」「学校の花」の実の母親がいない子どもたちは、素直になることで幸福になった。つまりこちらでは本人の問題である。大人向けの作品では周りの人間が哀れまない、同情しないことを解決方法として提示し、児童への作品では素直になる心の大切さを説いている。同じ自選集に収録された「化粧と口笛」と「学校の花」を並べ見ることで、一般向け作品と児童向け作品へ込められた川端の思いの違いがわかるとともに、川端の児童向け作品への向き合い方を窺うことができよう。

他の『級長の探偵』作品はどうだろうか。「級長の探偵」「コスモスの友」は級長、「駒鳥温泉」「翼にのせて」は女学校や師範学校受験を考える少女たちといったように、『級長の探偵』収録作品の主人公は、総じて学校の模範生や裕福な家庭環境にある子どもたちであり、家族の愛情を受けて育った性格も明るくて素直な子どもたちばかりである。では、それぞれの作品の中で「不幸」や「不運」を背負う役回りの子どもたちはどうなのか。

「級長の探偵」では、清一の、目が見えなくなったことによる苦労、それをはねのけるような前向きな行動力が描かれている。「夏の宿題」の俊子は妹を病気で亡くしてしまう。そのため成績が落ち、友人とも疎遠になる。しかし妹の死を乗り越える力を持っていることで友人との関係は修復する。「駒鳥温泉」では、主人公の妹みどりが事故にあい、足を傷めてしまう。みどりは競争の選手だったため、一時は家にこもって一生表に出ないと言っていたが、来ようとしなかった温泉にも湯治のためにやって来て、まわりの親切を素直に受ける。そして回復し元通り走ることができるようになった。

「翼にのせて」では、栄子が家計の悪化で師範学校受験を諦め食堂

女給に就職する。一緒に受験勉強をしていた千枝子は女学生となった。二人は栄子が勤める食堂で再会する。栄子は、やがて家計が回復し受験が可能となると分かると「師範へ入るの、一年おくれたけれど、でも、ここで働いたのだつて、きつと勉強ね。」[44]と明るく言い、食堂女給をしていたこともプラスに考える、前向きで明るい少女である。

「コスモスの友」では、転校生澄子がコスモスの花を傷めた犯人として疑われる。澄子は前の学校の友人の病気快癒の願掛けのため、誰とも仲良くしないと決めて、同級生と打ち解けていなかった。これが原因で疑われていたのだが、友人が回復し、すべてを打ち明けたことで仲良くなる。

「不幸」「不運」の見当たらない作品もある。「愛犬エリ」の主人公は母がいない綾子だが、彼女は父親と祖母に愛されて育っており、作品自体も先生からもらった子犬をめぐっての物語である。母犬の愛情について先生から教えられるが、母のいない綾子が、それについて何かを思うことはない。また「弟の愛犬」も両親に愛されている姉弟の話であり、子犬を拾った弟がこっそり飼おうとする様子を描いたもので、最後には願いが叶う。

このようにみてくると、『級長の探偵』で「不幸」や「不運」を背負う役回りの子どもたちは皆、それを乗り越える力を持っている。清一、栄子には苦労を受け入れ、それを克服する力がある。俊子は妹の死を乗り越える力を持ち、みどりは主人公の手助けを受け入れたことで怪我の回復が早まった。これは千花子の提案を受け入れた小夜子にも通じることだろう。澄子は友人が回復すると級友たちにすべてを話し打ち解けていった。つまり清水さんやよし子と同じように素直になることで問題が解決する。彼、彼女たちは皆、自分から良い方向へ進んでいこうとする心、手助けしてくれる周りの力を受け入れる心があることで幸せな結末を迎えている。

明るく素直な優等生の主人公たちと変わりなく、「不幸」「不運」な役回りの子どもたちも、「幸せになる力」を自分で持っている。『級長の探偵』の収録作品がすべて『少年倶楽部』『少女倶楽部』掲載作品であるため、雑誌の特質に合わせて書かれたとも考えられるが、この、子どもたちの幸せは素直な心によってもたらされるという考えは、「化粧と口笛」との比較からも伺えるように、川端が大切にするものであり、これが「子供の読物」として、子どもに伝えたいことだったのではないだろうか。

四、「学校の花」と「子供の読物」

以上のように、川端が『級長の探偵』収録作品で描いたのは、子どもの日常であるとともに、主人公たちの素直さ、明るさ、友情を大事とする姿である。子どもたちにそのようであってほしいという想い。これは性別にこだわらない、すべての子どもへの川端の想いであろう。例えば「級長の探偵」は男子の友情を描いてるが、これがもし『少女倶楽部』掲載作であれば、女子の友情物語としても成立するだろう。実際「コスモスの友」が「級長の探偵」と同じような展開になっていることから考えても、少年雑誌だから男子を主人公に、少女雑誌だから女子を主人公にしただけで、男女に合わせた「らしさ」や小道具などの相違や、それによる面白さの違いはあるとしても、描かれる子ども像に大きな変化はない。

「学校の花」は主人公が行動を起こし、問題解決をしようとする物語であった。素直な心を持ち、前向きに行動しようとする姿は『級長の探偵』収録作品の子どもたちに共通するものだ。友を思う気持ち、明るさや素直さを良しとすることには、男女の性差は関係ない。しかし、「学校の花」だけは、波乱に満ちた生い立ちの設定、女学生同士の恋愛感情や女性の先生へのあこがれの描写など、「少女小説」らしさをもっており、他の『級長の探偵』収録作品との違いを感じさせる。この「少女小説」らしさが、「子供の読物としてはふさはしくない」ところではないだろうか。

『川端康成選集　第五巻』に「学校の花」を選び、「子供の読物としてはふさはしくないところが少くない」が「子供のものを幾つか書いた記念」として『級長の探偵』から一篇選んだと述べた川端には、この時までに、雑誌『令女界』掲載作品があった。『令女界』は女学生向けの文芸雑誌で、大正末期頃には女学校卒業前後の若い女性を対象としたとされる[4][5]。川端がこの時までに『令女界』に掲載した四作品のうち、「翼の抒情歌」は「学校の花」と同じく主人公が女学生である。昭和二三年に少女向けと感じさせる装幀で東光出版社から刊行されることになるが、選集の刊行時にはまだ単行本未収録作品だった。昭和八年一月から六月の連載作品であり、分量としては「学校の花」より二か月分多いが、選集収録に際して、「学校の花」の代わりになり得そうである。しかし選ばれなかった。『令女界』作品は、読者の対象年齢が『少女倶楽部』よりも高いことから、川端に「子供の読物」として認識されていなかったのだと推察できる。

女学生が主役である「翼の抒情歌」の主題は恋愛で、まずは友人との親密な友情関係が描かれ、それが姉の婚約者から想いを寄せられることで、同性愛的友情から異性愛的恋愛へと変化していく。移り変わる主人公の心情を詳細に描くところも含め「少女小説」的で、「学校の花」の「子供の読物としてはふさはしくない」部分と共通するところだろう。

「学校の花」は、「子供の読物としてはふさはしくないところが少くない」とされながらも、「子供のものを幾つか書いた記念」として、大人向けの選集に収録された。この作品は、川端が考える「子供の読物」と「少女小説」との境界に位置する作品といえよう。

注

1 『少女倶楽部』昭和八年八月号（二九〇―二九一頁）。深澤晴美氏が全集未収録文として発表している。（「戦前・戦中の少女小説―「少女倶楽部」から「少女の友」へ―」『川端康成　新資料による探究』鼎書房、二〇二二年一〇月、一五二頁。）

2 『全集　補巻二』二七一―二七二頁。本論での『全集』は『川端康成全集』（新潮社、一九八〇年～八四年）に拠り、漢字は新字に改めている。

3 『全集　第三十三巻』五七四頁。

4 先行研究としては、注1前掲の深澤氏論文以外に主なものとして、中嶋展子「川端康成の少女小説―「少女倶楽部」掲載作品の素材を中心に―」（『岡大国文論稿』三七、二〇〇九年三月、六二頁）が、川端の「禽獣」と比較して「同時期に書かれた『学校の花』では母を恋う

テーマが表裏をなすように色濃く表れている」と指摘する。また宮川健郎「『級長の探偵』解説」（鳥越信編『たのしく読める日本児童文学【戦前編】』ミネルヴァ社、二〇〇四年四月、七九頁）は、「『学校の花』には、その祖父とも死別して孤児となった作者の体験や、代表作『伊豆の踊子』に描かれた旅芸人との交流の体験を見て取ることもできるだろう。」と述べる。羽鳥徹哉「川端康成解説」（『日本児童文学大系　第二三巻』ほるぷ出版、一九七七年一一月、四七八頁）は「川端自身の境遇と体験に深く根差した作である。」とし、続けて「しかし、決して傑作とは言えぬ。筋も不自然だし、御都合主義である。因縁めいて古くさい。子供相手の作のせいか、感傷的で、抑制がきいていない。しかし、川端の一面が、それだけ正直に出ているともいえる。「禽獣」の取り澄まし方より、こんな感傷に溺れたい願いが、また人情の真実であろう。」（四七八頁）と述べたうえで、『少女倶楽部』掲載作の中で「学校の花」は「やや異質」とする（四七九頁）。高比良直美「上総興津と川端康成」（『川端文学への視界　川端文学研究一九九二　機関誌年報№８』一九九三年六月）は、昭和八年の夏、川端夫妻がひと月余りを上総興津（千葉県勝浦市興津）で過ごしたことを検証し、「学校の花」の臨海学校の描写と「上総興津抄」（『文藝首都』昭和八年一〇月号）に書かれていることに共通したものがあると述べ（八七頁）、「川端文学の描く女性の典型があたたかく蘇っている。」（八八―八九頁）と「学校の花」の少女像について指摘している。

5　『全集　第十九巻』二二四頁。

6　『全集　第十九巻』一六七頁。

7　西條八十の詩に似たものがある。「母さんの眼」という詩で、よく似た部分を抜粋すると、

母さんの眼を見てゐると／僕はお池をおもひだす。／まはりに細い樹が生えて／きれいな水のまん中に／黒い小さな島がある。

（複刻『赤い鳥の本』ほるぷ出版、一九七七年三月、八一頁）

とある。行雄の歌では、

先生のお眼々は円いお池／お池のなかに何がある／円い小さな島がある／島の中には何がある／小さな家や町がある

（『全集　第十九巻』一六六頁）

となっており、類似は明らかであろう。西條の詩は『鸚鵡と時計』（赤い鳥社、大正一〇年）に掲載されており、大正八年に発表された「夕顔」がある。これは千花子が「去年遊んだ砂山で…」とうたっていた詩である。千花子が歌う「夕顔」に続き行雄の歌を読んだ読者の中には、西條八十の詩を連想する子どももいたのではないだろうか。

四章に出てくる「濱の子供とうち上げる」も西條の詩で、大正一二年一〇月号の『雑誌童話』に掲載されたのち、『赤き獵衣』（西條八十、新潮社、大正一三年二月）に収録されている。五章に出てくる「おやすみ、おやすみ、雁がなく」（『全集　第十九巻』一九四頁）で始まる詩は三木露風の「おやすみ」で、大正一〇年に童謡集『真珠島』（ア

ルス）に掲載されている。小夜子が歌う「秋の風はうれしいな…」で始まる詩は確認できなかったが、川端が、大正時代に発表され、単行本化もされた童謡を作品に取り入れていることがわかる。

8 『全集　第十九巻』一六三頁。

9 『全集　第十九巻』一七四頁。

10 『全集　第十九巻』三〇九頁。

11 『全集　第十九巻』二〇五頁。

12 『全集　第十九巻』二〇七頁。

13 菅聡子編『〈少女小説〉ワンダーランド　明治から平成まで』（明治書院、二〇〇八年七月）によると、「エス」とは「おもに大正・昭和初期の女学校で用いられた隠語で、女学生（あるいは少女）同士の一対一の親密な友愛関係を指します。」（一五七頁）とあり、女学校では、上級生と下級生、同級生同士、女性教師と女学生の間にもみられたとしている。

14 『全集　第十九巻』一五三頁。

15 『全集　第十九巻』一七九頁。

16 『全集　第十九巻』一九二頁。

17 『全集　第十九巻』一八八頁。

18 「文藝時評」（『新潮』昭和八年七月号）、引用は『全集　第三十一巻』一一五頁。

19 「コドモ座」（『文学界』昭和九年六月号）、引用は『全集　第二十七巻』四三頁。

20 注19と同じ。

21 岩淵宏子、菅聡子、久米依子、長谷川啓編『少女小説事典』（東京堂出版、二〇一五年三月）では、少女小説について以下のように説明している。

「エス」を中心とし、シスターフッド・異性愛など愛の問題を描く作品はむろんのこと、成長物語、時代小説・冒険譚、社会派系、ユーモア系、怪奇・探偵もの、悲しみや不幸をテーマとするもの、スポーツ少女、健康な少女の活写など多彩となり、戦局の進展に伴い、翼賛体制に迎合した国策少女小説も出てくるというように多種多様な趣を呈した。

（岩淵宏子「少女小説の出発と変遷　昭和戦前期」（一〇）頁）

また、同書「雑誌　関連事項　関連領域」の解説では、明治から昭和初期の吉屋信子『花物語』、川端の『乙女の港』、横山美智子『嵐の小夜曲』をあげたうえで、「女学校を舞台とした少女たちの友情、（略）父親の財政的転落と家族の別離と引き裂かれる友情といった物語のパターンは、初期少女マンガの基本的フォーミュラとして継承されることとなった」（三五〇頁）と、初期の少女小説の特徴が後の少女マンガへと踏襲されていることを指摘している。

22 「少女と文藝」(『若草』大正一五年三月号)、引用は『全集　第三十二巻』五〇六頁。

23 「少女と文藝」(注22前掲)五〇八頁。

24 注23と同じ。

25 『全集　第十九巻』二〇一頁。

26 『全集　第十九巻』一七八―一七九頁。

27 『全集　第十九巻』二〇三頁。

28 『全集　第十九巻』二一〇頁。

29 無邪気さが事態を好転させるのは行雄にもあてはまる。隠すべきことをうっかりと口にする計算のなさが問題解決に結びついた。

30 『全集　第十九巻』一四九頁。

31 注30と同じ。

32 『全集　第十九巻』一八九頁。美しい少女に対する描写は「コスモスの友」の澄子に対しても同じように睫の描写が使われている(「睫の陰の濃い目をぢつと伏せてゐました。」『全集　第十九巻』三二〇頁)。あまり容貌について詳細な描写がみられないのも特徴といえる。

33 『全集　第十九巻』一四九頁。

34 唇の描写は、同時期の川端の作品「藤の花と苺」(『婦人倶楽部』昭和八年六月号)にも見られる。「藤の花と苺」は、結婚して半年ぐらいの若い夫婦を描いた短編で、この中に妻が語る場面があり、「水晶の数珠、藤の花、梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき乳児の苺食ひたる。つて『枕草子』にあるわね。(略)赤坊が苺を食べる唇つて、ほんたうに綺麗でせうね。」(『全集 第一巻』三九五頁)と『枕草子』が引用されている。

この「あてなるもの」について、『風景』(昭和四五年五月号)で川端が『『あてなるもの』とは上品に美しいものといふことでせう」と述べていることを、中嶋展子氏(「川端康成『藤の花と苺』論―『あてなるもの』と『翼の抒情歌』」『芸術至上主義文芸』四三号、二〇一七年一一月)、内田裕太氏(「川端康成と『枕草子』」『文藝空間』一四号、二〇二二年四月)らが取りあげている。周知のとおり、川端は学生時代から古典に親しんでおり、千花子の唇の描写も『枕草子』のこの「あてなるもの」を思い出させるものだと考えられる。

35 注15と同じ。

36 『全集　第十九巻』一三一頁。

37 『全集　第十九巻』二二四頁。

38 注37と同じ。

39 『全集　第十九巻』一二五頁。

40 『全集　第十九巻』一一三頁。

41 『全集　第十九巻』一一九頁。

42 『全集　第五巻』四〇頁。

43 注42と同じ。

44 『全集　十九巻』三一〇頁。

[45] 『少女小説辞典』（注21前掲、三一七頁。）昭和一二年までに発表していたのは四作品で、主題は恋愛か母親の子どもへの思いを描いたものである。大人の女性が主人公になっているのが三作品、そして「翼の抒情歌」である。